

虫めづる姫君の異能性

Exceptional talent characteristics of Mushimezuru-Himegimi
(A lady who loves insects and caterpillars)

福田 景道
Akimichi FUKUDA

要旨

『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の主人公の姫君の異常性は、虫類の異様愛玩と外見の異装異貌の2点に集約できるが、その異常を学識と論理を駆使して正当化する手法がまた異常であり、不完全・不合理である。この異常性は、『今鏡』で評価されている「異能性」に近似する。「虫めづる姫君」と『今鏡』には「本」と「末」とを同等に尊重する基本思想が顕示されていて、両作品には共通性がある。虫めづる姫君は「本」(烏毛虫=幼虫)のみを重視するので、基本思想に反していることになり、ここでも彼女の論理は破綻している。ところが、作品内に名前のみが紹介される蝶めづる姫君を「末」(蝶=成虫)のみを重視する存在と認めてみると、虫めづる姫君と蝶めづる姫君とが相補って本末をともに尊重して基本思想を具現する構図が確認できるのである。すなわち、「虫めづる姫君」という作品名は、烏毛虫めづる姫君と蝶めづる姫君の二人の姫君を表すと推断できる。姫君の異能性は、もう一人の姫君に半面を委ねることによって成り立つとも言える。

キーワード：堤中納言物語、虫めづる姫君、今鏡、異常性、異能性、蝶めづる姫君

一 「虫めづる姫君」の異常性

「虫めづる姫君」は、短編王朝物語作品の集合体『堤中納言物語』の中の一編の題名であり、同時にその主人公の通称でもある。この姫君は、その異様な呼称のとおり、風変わりな珍奇な人物に造型されている。おそらく、王朝文学世界でも屈指の特異性の持ち主であろう。本稿はこの姫君の特異性・珍奇性・異常性の根源の解明を目指すものである。

さて、物語世界は、異常性の提示をもって始発する。

よるづの虫の、恐ろしげなるを取り集めて、「これが、成らむさまを見む」とて、さまざまなる籠箱こぼこどもに入れさせたまふ。中にも「烏毛虫かほむしの、心深きさましたるこそ心にくけれ」とて、明け暮れは、耳はさみをして、手のうらにそへふせて、まぼりたまふ。⁽¹⁾
(407頁)

眉まゆさらに抜きたまはず。齒は、くろ黒め、「さらにうるさし、きたなし」とて、つけたまはず、いと白らかに笑えみつつ、この虫どもを、朝あした夕ゆふべに愛したまふ。人々おぢわびて逃ぐれば、その御方は、いとあやしくなむののしりける。かくおづる人をば、「けしからず、ばうぞくなり」とて、いと眉まゆ黒くろにてなむ睨にらみたまひけるに、いとど心地なむ惑まどひける。
(408 頁)

虫の飼育・観察に熱中し、眉を抜かず、お齒黒を施さない、驚くべき日常である。ここに表出される虫めづる姫君の異常性は、「虫めづる」という行為と、外貌や衣装の非常識性(2)とに集約できる。

虫を偏愛する性向については、卑賤の男童に命じて虫類を扱わせ、虫の名を問い聞き、未知の虫には自ら命名する異常さも加えられる(408 頁)。蝶の羽化するさまを親に見せる場面もある(409 頁)。毛虫見たさに我を忘れて簾中から姿を現し、遂には毛虫を扇に載せて間近に注視しようとする様子が活写されてもいる(415・416 頁)。とにかく異常なまでに昆虫を好むのである。「烏毛虫か は、むしは袖そでに拾ひ入れて、走り入りたまひぬ」(417 頁)という行動などは、愛好の域を出たものと思われる。

さらには、蟻螂いほじり(カマキリ)や蝸牛かたつぶり(カタツムリ)に関する歌を歌わせ、自身も「かたつぶりの…」と朗詠する(411 頁)。男童に「けらを、ひきまろ、いなかたち、いなごまる、あまびこ」と昆虫・両生類・節足動物の名を付ける(412 頁)。「はたおりめ」(コオロギ)模様の小袷を好んで着用する(416 頁)。ここに至ると、もはや単純に虫の愛好家と見なすことはできない。上流貴族の姫君が虫を愛でること自体の異常性に加えて、虫の愛で方も尋常ではないのである。

虫めづる姫君の異常性は、外見の非常識性としても明瞭に発現している。上掲の「眉さらに抜きたまはず」「齒黒め(中略)つけたまはず」のほかに、「眉まゆいと黒く、はなばなとあざやかに、涼しげに見えたり。口つきあいぎやうも愛敬あいきやうづきて、清げなれど、齒黒めつけねば、いと世づかず」(415 頁)という描写もある。コオロギを表現する衣装も特異である。「耳はさみをして」(407 頁)・「あららかに踏み出づ」(415 頁)などの姫君に相応しくない所作の数々も外見の異常を助長するであろう。「白き袴はかま」の愛用(416 頁)も普通ではなく、貴族女性の通常の身だしなみからは明らかに逸脱していることが指摘される(3)。

このように、愛好物と外貌によって、圧倒的な異常性を発揮する姫君であるが、その異常さを正当化する論理を異様に積極的に開示する。そしてその論理そのものも異様なものであった。これが加わることによって異常性は増幅され、最高値に達するとも言える。この異様な論説にこそ、姫君の異常の根源が潜むと言うべきかもしれない。次節に、その論説方法の異常性を検討する。

二 虫めづる姫君の論証方法

この物語では、虫めづる姫君の異常性が語られるに際して、それを正当化する論拠が彼女自らによって揚言されるのが通例となっている。虫類愛玩の事実が示される直前には、

人々の、花、蝶やとめづるこそ、はかなくあやしけれ。人は、まことあり、^{ほんぢ}本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ（407頁）

と発言される。化粧を拒否する実態が描かれる前に、

人はすべて、つくるふところあるはわるし（408頁）

と断定されているのである。この⁽⁴⁾が姫君の異常を正当化するための言辞であることは疑えない。塚原鉄雄は、姫君の実践原理の基礎に二つの「命題」を見いだす。「根源を重視し末葉を無視すること」と「人工を排除して自然を尊重すること」がそれで、

・ ⁽⁴⁾に対応するものである。

このように異常性を伝説に基づく普遍的真理のような理路によって正当化する姫君の姿は、高く評価されている。「透徹な理性」をもつ「理智的な聡明な女」と評され⁽⁵⁾、「理知的、科学的、研究的な性向」⁽⁶⁾が認められるなど、知性が賛美される場合、「脱王朝女性を目指す」⁽⁷⁾と見られ、「貴族社会の日常的な良風意識に対する批判・反抗」⁽⁸⁾が読み取られる場合、仏教思想や仏教的求道精神が注目される場合⁽⁹⁾もある。いずれも知性的・先見的女性として肯定的に捉える点で共通している。

一方、姫君の論理や理知を評価しない立場もある⁽¹⁰⁾。姫君の生態を怪奇醜悪で嫌悪忌避すべきものと認めて、「伝統の、優美の美学」に対立する「世紀末的な露悪思想と猟奇趣味とを反映する、^{たいはい}類廃精神」の所在までもが認められている⁽¹¹⁾。

また、姫君の論理や行動の矛盾が指摘される場合もある⁽¹²⁾。矛盾の一例を示す。

よるづのこと本^{もと}をたづねて、末⁽¹³⁾を見ればこそ、事はゆゑあれ。いとをさなきことなり。（409頁）

という警句を発して、姫君が烏毛虫が羽化して蝶に変ずるさまを両親に見せる場面がある。蝶（成虫）が毛虫（幼虫）の変じたものであることを実証して、「むくつけげなる烏毛虫」を愛玩する嗜好を正当化しようとするものであるが、これは幼虫に一定の価値（成虫の根源としての価値）を認めることにはなっても、成虫の価値を失わせるものにはならない。ところが、直後に成虫に価値がないという理屈が示される。蚕の

繭が絹糸を生産する事実を、

きぬとて、人々の着るも、蚕^{かひこ}のまだ羽^{はね}つかぬにし出だし、蝶^{てふ}になりぬれば、いともそでにて、あだになりぬるをや（409頁）

と説明するのである。絹を生み出す繭（蛹）には価値があるが、蝶（成虫）は無価値であるという論旨である。しかし、繭にしか価値を認めないことは、幼虫としての蚕の価値をも認めないことにならないだろうか。幼虫の段階を経ずして繭（蛹）の状態はあり得ないのであるから、完全に無価値の成虫とは異なるが、本源としての幼虫を認める姿勢は見いだせないであろう。そもそも、本と末の対比構造の中に、中間的な蛹を加える点に無理があるのではないか。いずれにしても と の論理は矛盾する。

の「本地」を重視する態度などから見ると、 が不適切なのかもしれない。「虫めづる姫君」では、成虫・蝶（末）よりも幼虫・毛虫（本）を重視する傾向が明らかだからである。それでは、 はどのようにして発想されたのであろうか。三角洋一は、「このような考え方は『今鏡』序にも、「源を知りぬれば、末の流れ聞くに、心汲まれ侍り」と見え」と指摘し、最終的には『摩訶止観』に行き着くと説く⁽¹⁴⁾。辛島正雄は、さらに『大鏡』の「流れを汲みて、源を尋ねてことは、よくはべるべきを」にも注目する⁽¹⁵⁾。

虫めづる姫君の異常性は、昆虫・節足動物・両生類などの小動物を愛玩する点と、通常の貴族女性の化粧と衣装を拒否するところにある。しかし、最も異様な性質はそれらの表面的異常性を正当化するために駆使する論理にある。それらは一見高度な学識に基づくようでありながら、実際には矛盾や不合理に覆われた異様な論理展開なのである。

なお、山岸徳平が、この姫君の異常嗜好の根因に萎黄病（chlorosis）の症状を見だし、それに併発する歯槽膿漏・体毛過多症を異貌に直結させている⁽¹⁶⁾。これは「いと白らかに笑みつつ」（408頁）を歯茎の白さの表現と解釈して歯槽膿漏と見なし、「いと眉黒^{まゆくろ}にて」を生来の眉の濃さと見なすことに依拠するものであるが、現行本文では、前者はお歯黒をしていないこと、後者は眉を抜かないことを意味すると理解できるので、根拠は極めて薄弱であると判断しなければならない。山岸説の難点については、早く山崎賢三や鈴木一雄によって明確に指摘されているので、姫君の病理説はほぼ有効性を失ったと思われる。しかし、それにもかかわらず、現在でもほとんどすべての注釈書に、山岸の病理説が紹介されている。これは、山岸による『堤中納言物語』の注釈書類が多量に出版され⁽¹⁸⁾、その後のほとんどの注釈的研究や解説に一説として紹介され続けたため、現在でも有力な考説であるかのように見えるのである。姫君萎黄病説には依り難いことを確認しておきたい。そのほかにも、稲賀敬二に「毛虫愛撫^{あいはぶ}は姫君の演技とも見られる。男の虫がつかぬようにする結婚拒否型の「虫めづる」新戦略⁽¹⁹⁾か」という独創的な見解があるが、積極的にそのように理解しなければならない根拠が見られないので、今は考慮の対象としない。

三 『今鏡』との関係

「虫めづる姫君」の虫めづる性格については、「蜂飼の大臣」藤原宗輔との関連が指摘されている。宗輔が蜂を愛玩したことは、『今鏡』『古事談』『帝王編年記』『尊卑分脈』などに見られるが、そのうち最も古いのは、『今鏡』の次の逸話である。

思ひかけぬことは、蜂といひて人さす虫をなむ好み飼ひ給ひける。からなる紙などに蜜ぬりて、捧げてありき給へば、いくらともなく飛びきて遊びけれど、おほかたつゆさしたてまつることせざりけり。足高、角短、羽斑などいふ名つけて呼ばれければ、召しにしたがひて、聞き知りてなむ来つつ群れみける。(藤波の下第六「唐人の遊び」中・427頁)

この宗輔との関連性は、早くから清水泰らに注目され、山岸徳平によって宗輔の娘「若御前」までを含めたモデル論が展開されている。土岐武治も、清水浜臣自筆本書入れを受けて、「虫めづる姫君」物語に、『今鏡』『古事談』『十訓抄』などに見られる「宗輔蜂飼ひの説話」の影響を認める。積極的な根拠がないため、難点の指摘が続出していたが、その後、植木朝子が、宗輔周辺で、虫を囓したてて今様に興ずること、「虫めづる姫君」が創作され、鑑賞されたことは十分にあり得たと指摘するなど、宗輔の存在は決して無視できないと思われる。

『今鏡』の宗輔は、「ことごとこの世の用事など、いと申し給ふ事なかりけり」(中・426頁)と無能ぶりが明記されながら、菊や牡丹を育て上げ、蜂を飼い慣らす異能が評価されている。これは、実在の宗輔とは隔絶し、『今鏡』世界の価値観に基づく。『今鏡』では、本来は無用の特異性や珍奇性が異能性として貴族の条件として認定されていると思われる。ここに虫めづる姫君の異常性と通ずるものがありはしないだろうか。彼女も作品世界で確かな存在感を示しているからである。

このように、「虫めづる姫君」と『今鏡』の思想性が類似すると仮定した場合、前掲の「本をたづねて、末を見ればこそ、事はゆゑあれ」と『今鏡』の類似表現との関係が注目される。『今鏡』には3ヶ所に同様の表現が認められる。

源を知りぬれば、末の流れ聞くに、心汲まれ侍り。(「序」上・33頁)

水上あらはれぬは、流れのおぼつかなければ、(藤波の上第四「藤波」中・25頁)

そのゆかりのありさま、源をたづぬれば、いとやんごとなくなむ侍る。(村上の源氏第七「うたたね」下・25頁)

いずれも遙か昔に遡って歴史語りを展開する根拠とするもので、現在(末)を理解するためには過去(本)の理解が不可欠であるという主張にほかならない。「本」に関

心が傾くとは言えるが、「本」も「末」も等しく重要性が認められている。一方を欠いては『今鏡』の歴史叙述は成立しないのである。

『今鏡』のこの部分は、『大鏡』を継承するものと考えられる。「流れを汲みて、源を尋ねてこそは、よくはべるべきを」⁽²⁸⁾(63頁)、「本末知ることは、いとありがたきことなり」(337頁)などが、『今鏡』の前提として認識されていたに違いない。この『大鏡』でも「流れ」「末」と「源」「本」とは同等に重視されている。

『今鏡』や『大鏡』との近似性からみて、「虫めづる姫君」のも本来は「本」と「末」の双方に重きを置くものであったと推断できる。しかし、それではと矛盾する。その上、蝶を無視して烏毛虫のみを賞翫する姫君の基本姿勢とも矛盾している。伝説や歴史物語に基づき、高邁にも見えるの警句は、実は姫君の実体と乖離するものだったのである。⁽²⁹⁾の「本地たづねたるこそ、心ばへをかしけれ」についても、難解ではあるが、たとえば、物事の表面の姿(末)にまどわされず本来の姿(本地)を知ることこそが物事の由来・本質に到達することだ(事はゆゑあれ)という思想を読み取ると、毛虫を尊重する根拠としては相応しいとは言い難い。毛虫は源ではあっても、本地や本質ではあり得ないであろう。

虫めづる姫君は、高度な学識を誇示しつつ、自身の倒錯的志向を正当化しようとするのであるが、そこに矛盾と欠陥が湧出するのである。正当化の論理は完成していないと言ってもよい。この意味で姫君の異常性に不完全性の要素を加えることができる。

姫君の異常性は、具象的な異常行動と抽象的な異常言説とからなる。ところが、両者は整合していない。成虫(末)を軽視して幼虫(本)のみに傾倒する嗜好性を正当と見なす論理が成立していないとも言える。ここに最大の異常性が潜むのではなからうか。

四 二人の虫めづる姫君

「虫めづる姫君」の冒頭は、

蝶めづる姫君の住みたまふかたはらに、^{あぜち だいごん}按察使の大納言の御むすめ、心にくくなべてならぬさまに、親たちかしづきたまふこと^{かぎ}限りなし。(407頁)

と、「蝶めづる姫君」で始まる。このもう一人の姫君は、世間一般の常識的姫君の典型⁽³¹⁾、王朝的な美德を象徴する存在⁽³²⁾と見なされるのが通例である。「世俗・常識・浮薄を象徴する存在」⁽³³⁾、「それ以前の物語の女主人公の総体」⁽³⁴⁾などの見方も含めて、正常な姫君という評価を否定するものはないであろう。

ところが、蝶めづる姫君という呼称には、正常とは言い難い側面がある。大井容子は、蝶が日本文学の素材になり難いことを実証する。象徴的・抽象的な意味での用例はわずかに見られるが、「生きた蝶」が具象的に描かれる例は極めて稀少であることが

ら、蝶めづる姫君の非常識性・異常性を指摘するのである。⁽³⁵⁾

一方、高橋文二は、大井と同種の用例から蝶めづる姫君が「蝶そのものを生物学的に直視していたわけではない」と解釈し、「『花や蝶や』と言って観念的な世界に遊んでいるにすぎない」とする。⁽³⁶⁾ 蝶めづる姫君は、虫めづる姫君の異常性に対して正常な姫君の象徴としての役割を果たすもので、実際に蝶をめづる行動があるわけではない、という考え方もあり得る。⁽³⁷⁾

蝶との距離感をめぐって見解が分かれるようである。そこで、蝶めづる姫君の正常さについて改めて検討してみたい。作品の冒頭を飾るというだけで、蝶めづる姫君の存在は軽くないと思われるからである。

それに加えて、「虫めづる姫君」という題名でありながら、虫めづる姫君という呼称が本文に一度も表記されない点も看過できない。「按察使の大納言の御むすめ」「この姫君」「姫君」「御前」がこの女性の呼び名である。一方で、「蝶めづる姫君」の称は作品中に二度用いられている。蝶めづる姫君の存在を前提にして、はじめて読者は虫めづる姫君と呼ばれるべき女性の存在を知るのである。蝶めづる姫君なくして虫めづる姫君は作品世界に存立し得ない。

また、女房たちの「いかなる人、^{てら}蝶めづる姫君につかまつらむ」(410頁)・「蝶めでたまふ人」(411頁)などの発言によって、この姫君の実在感はさらに増すであろう。

蝶めづる姫君は、思いのほかに実在性を持ち、虫めづる姫君の隣にいるのである。

また、虫めづる姫君が特に烏毛虫を好むという実状に着目すると、この姫君は正確には烏毛虫を愛づる姫君と呼ばれなければならないことになる。その場合、蝶めづる姫君も、虫めづる姫君と呼ばれる資格をもつ。蝶も烏毛虫と同等に虫の範疇に含まれるからである。「虫めづる姫君」という題名は、「按察使の大納言の姫君」の別名ではなかったのである。主人公の名が虫めづる姫君であると確定できる材料は作品本文には見いだせない。したがって、次のような仮説が成り立つ。

「虫めづる姫君」という物語には、二人の虫めづる姫君が存在する。一人は烏毛虫を愛づる姫君で、もう一人は蝶という虫を愛づる姫君である。

このように考えると、「虫めづる姫君」という題名でありながら、「虫めづる姫君」と呼ばれる人物が登場しない不自然さが氷解する。

蝶めづる姫君が愛玩するのは、烏毛虫めづる姫君が烏毛虫を愛玩するのと同様に、生物としての蝶のみであろう。王朝的美意識の軌範としての「胡蝶」でも「蝶・鳥」でも「花・蝶」でもない。姫君は確かに生きている昆虫を愛でるのである。

三谷栄一は、この物語を、性を自覚しない虫めづる姫君が性を自覚する蝶めづる姫君へと成長・飛翔する過程を描くと見る。⁽³⁸⁾ 中島尚は、虫めづる姫君が蝶めづる姫君に脱皮する可能性のあることを強調する。⁽³⁹⁾ 同様の視点により、成長しない異常な虫めづる姫君と正常に成長した蝶めづる姫君とが対比的に捉えられ、虫めづる姫君のあり方に結婚拒否の意味が見いだされる場合が多い。⁽⁴⁰⁾ しかし、蝶めづる姫君も不完全性と異常性を帯すると考えられる。

の警句「本をたづねて、末を見ればこそ、事はゆゑあれ」がこの物語の根本理念であった。烏毛虫めづる姫君が「本（幼虫）」を賞翫し、蝶めづる姫君が「末（成虫）」を賞翫するのである。二人の姫君は、一つの事物の表裏の関係にあるとも言える。両人が相補うことによって の理想が具現できると言っても大過ない。両人の対照性や相反性の剔抉に基づいて作品世界の根基が追迫される論究は少なくない。⁽⁴¹⁾それに比して、本稿は両姫君の相互補完関係を見いだすところが相異なる。烏毛虫めづる姫君の異常性は、蝶めづる姫君の受け持つ半面を捨象することによって、異彩を放つと言える。ここに「虫めづる姫君」物語の独創性がある。王朝末期の『今鏡』的価値観の中であって、その特異性・珍奇性は、他に類例のないことによって、異能性に転じるに違いない。⁽⁴²⁾

注

- (1) 『堤中納言物語』「虫めづる姫君」の本文は、稲賀敬二校注・訳「堤中納言物語」(『落窪物語・堤中納言物語』新編日本古典文学全集 17、平成 12 年、小学館刊)による。以下同じ。
- (2) 玉井絵美子「『虫めづる姫君』の再検討 姫君の服装を通して」(『花園大学国文学論究』第 31 号、平成 15 年 12 月)など参照。
- (3) 松尾聡著『堤中納言物語全釈』(昭和 46 年、笠間書院刊) 105 頁、三谷栄一「堤中納言物語」(同他編『堤中納言物語・とりかへばや物語』鑑賞日本古典文学第 12 巻、昭和 51 年、角川書店刊) 127 頁など参照。ただし、玉井絵美子前掲論文(2)には、白いというだけで「白き袴」を男物と理解し、男性性を読み取る通説の不当性が指摘され、その上で、周りからそれが女性としての常識の逸脱に見えても、彼女は「つくるふ所あるはわろし」という考えを実践しているだけなのである、と説かれている。
- (4) 塚原鉄雄校注『堤中納言物語』(新潮日本古典集成、昭和 58 年、新潮社刊) 46 頁。
- (5) 入江相政「堤中納言物語 虫めづる姫君について」『日本文学講座』第 3 巻、昭和 9 年、改造社刊)。なお、このあたり、注(10)までは、無作為に先行業績を引用したもので、代表的研究と見なす意図はない。
- (6) 鈴木一雄著『堤中納言物語序説』(昭和 55 年、桜楓社刊) 281 頁。
- (7) 室坂恵美子「堤中納言物語の研究 『虫めづる姫君』を中心に」(『たまゆら』第 12 号、昭和 55 年 10 月)。
- (8) 三谷栄一「堤中納言物語」(前掲 3) 96 頁。
- (9) 山崎賢三「虫めづる姫君の性格について 賢人の系譜」(『若杉研究所紀要』第 9 号、昭和 43 年 2 月)。
- (10) 三角洋一の「姫君を批判するとか、姫君を通して社会を風刺するというような意図もなく、ただ一風変わった姫君を活写していることが、この物語の生命であると思う」(『堤中納言物語』講談社学術文庫、昭和 56 年、講談社刊、99 頁)、土方洋一の「要するに姫君は、単純に虫の類が好きなのであり、なぜ虫を好むのかという他人に向けての説明は、後知恵の理屈、したがってシビアにチェックすれば、論理の綻びは至るところに見出せるはずである。」(「物語のポスト・モダン 虫めづる姫君」『鶴林紫苑』鶴見大学短期大学部国文科創立五十周年記念論集、平成 15 年 11 月、風間書房刊)などがある。
- (11) 塚原鉄雄校注前掲書(4) 46 頁。塚原鉄雄「世紀末的な猟奇趣味 虫めづる姫君の精神的座標」(『人文研究』第 27 巻 9 分冊-国語・国文学、昭和 50 年 12 月)も参照。
- (12) 加藤芙美子「『堤中納言物語』 「虫めづる姫君」における本地と批判精神の矛盾」(『早大会論集』第 1 号、平成 4 年 1 月) 保科恵「理念設定と叙述展開 虫愛づる姫君の素材構成」(『解釈』第 39 巻第 8 号、平成 5 年 8 月。同著『堤中納言物語の形成』平成 8 年、新典社刊 に再録)、土方洋一前掲論文(10)、小島雪子「物語史における『虫めづる姫君』(下)」(『文芸研究』第 160 集、平成 17 年 9 月)など。

- (13) 底本(島原松平忠房旧蔵十冊本)には、「よろつのことともをたつねて」とあるが、諸注を参考にして、「よろつのことともをたつねて」に訂して考察した。底本のままなら、「すべてのことを探究してから『末』を見ると物事の深意がわかる」などと解され、毛虫が蛹から蝶へと変転する様に合致する。この場合も烏毛虫(幼虫)と蝶(成虫)の価値に差はないことを確認しておきたい。
- (14) 三角洋一「堤中納言物語 『虫めづる姫君』の読みをめくって」(『国文学』第31巻第13号、昭和61年11月)。
- (15) 辛島正雄「『虫めづる姫君』管見 「かは虫」と少女」(『文学論輯』第39号、平成6年1月。同著『中世王朝物語史論』平成13年、笠間書院刊に再録)。
- (16) 山岸徳平「平安末期の物語に見えたる二つの現象 虫めづる姫君と縹の女御」(『学芸』第9号、昭和9年6月。同著『物語随筆文学研究』山岸徳平著作集、昭和47年、有精堂刊に再録)。
- (17) 山崎賢三前掲論文(9)、鈴木一雄著前掲書(6)282頁。
- (18) 『堤中納言物語評解』(昭和29年、有精堂刊)、『堤中納言物語・大鏡』(日本古典鑑賞講座第10巻、昭和34年、角川書店刊)、『堤中納言物語全注解』(昭和37年、有精堂刊)、『堤中納言物語』(昭和38年、角川文庫)など。
- (19) 稲賀敬二校注訳「堤中納言物語」(前掲書 1)406頁。同「堤中納言物語の 虫めづる姫君 - 異様な言動を演技と読めば -」(『国文学』第27巻第13号、昭和57年9月)参照。
- (20) 『今鏡』本文の引用は、竹鼻績訳注『今鏡(上・中・下)』(昭和59年、講談社学術文庫)による。以下同じ。
- (21) 清水泰著『堤中納言物語評解』(昭和4年、文献出版刊、昭和9年増訂版・立命館出版部)に「今鏡のは男の宗輔の話であるが、それを女にして、又蜂を好んで飼つたといふのを、蜂よりも人の嫌ふ烏毛蟲にかへて、巧に短篇小説にでつちあげたかの感がある」とある。
- (22) 山岸徳平前掲書(18)など。
- (23) 土岐武治「堤中納言『蟲めづる姫君』考 平安朝成立説の再検討」(『論究日本文学』第7号、昭和32年11月。同著『堤中納言物語の研究』昭和42年、風間書房刊に再録)。
- (24) 鈴木一雄著前掲書(6)283頁など。
- (25) 植木朝子「『堤中納言物語』『虫めづる姫君』と今様」(『国語国文』第65巻第9号、平成8年9月)。
- (26) このほかに、モデルの候補として『源氏物語』の「博士の娘」などが挙げられるが、有力な根拠は見いだせない。
- (27) この点については、「虫めづる姫君」をも視野に入れて、別稿で論ずる予定である。
- (28) 『大鏡』の引用は、加藤静子他校注・訳『大鏡』新編日本古典文学全集34、平成8年、小学館刊)による。
- (29) 三角洋一は、からは「『蝶をめでのならば、「かは虫」もめでよ』という主張を引き出すことしかできない」と指摘する(前掲論文 14)。
- (30) 池田和臣「文学的想像力の内なる『虫めづる姫君』 もうひとりのかぐや姫」(『中央大学文学部紀要』第73号、平成6年3月)参照。
- (31) 山崎賢三前掲論文(9)、神田龍身「虫めづる姫君、奇形趣味と博物学 堤中納言物語」(『国文学』第38巻11号、平成5年10月)、辛島正雄前掲論文(15)、西田恵理「『堤中納言物語』『虫めづる姫君』論 孤高の価値観と象徴性」(『筑紫語文』第16号、平成19年11月)など。
- (32) 上坂信男「堤中納言物語の虫めづる姫君」(『国文学』第14巻第14号、昭和44年10月)、三谷栄一「堤中納言物語」(前掲 3)95頁、阿部好臣「虫めづる姫君物語」(三谷栄一編『物語文学の系譜 平安物語』体系物語文学史第3巻、昭和58年、有精堂刊)、加藤芙美子前掲論文(12)、豊島秀範「虫めづる姫君」(西沢正史編『古典文学作中人物事典』平成15年、東京堂出版刊)など。
- (33) 土方洋一前掲論文(10)。

- (34) 三谷邦明「堤中納言物語」(『物語文学の系譜 平安物語』前掲(32))。
- (35) 大井容子「『蝶めづる姫君』について 『堤中納言物語』成立論のための序説」(『実践国文学』第50号、平成8年10月)。その末尾近くに「蝶めづる姫君のめでる蝶は、虫めづる姫君が生きた虫を飼っている関係から、生きた蝶である必要がある。(中略)姫君が生きた昆虫の蝶をめでるというケースは他の文学作品にはまず見られず、非常識な行為である。つまり、昆虫の蝶をめでることは王朝女性一般のすることではなく、蝶めづる姫君というのも実は特異な存在なのである。よって、旧来の解釈のように、異常な虫めづる姫君に対して、蝶めづる姫君を王朝の典型的な姫君と位置づける考え方は成り立ちがたいと言えそうである」とある。塚原鉄雄も蝶を愛玩飼育する珍奇な姫君と規定する(前掲書 4 47頁頭注)。
- (36) 高橋文二「異文化としての『蝶』 平安朝文学史の一隅」(『駒沢国文』第25号、昭和63年2月)。
- (37) 辛島正雄前掲論文(15)など参照。
- (38) 三谷栄一「堤中納言物語」(前掲 3) 139頁。
- (39) 中嶋尚「虫めづる姫君論」(『千葉大学教育学部研究紀要(第1部)』第38巻、平成2年2月。同著『平安中期物語文学研究』平成8年、笠間書院刊 に再録)。
- (40) 神田龍身「『虫めづる姫君』幻譚 虫化した花嫁」(『物語研究』第1号、昭和54年4月) 辛島正雄前掲論文(15) 東原伸明「『虫めづる姫君』のパロディ・ジェンダー・セクシャリティ」(物語研究会編『物語 女と男』新物語研究3、平成7年、有精堂刊) 立石和弘「虫めづる姫君論序説 性と身体をめぐる表現から」(『王朝文学史稿』第21号、平成8年3月) 井上新子「『虫めづる姫君』の地平」(『国文学攷』第158号、平成10年6月)など。
- (41) 神田龍身「虫めづる姫君、奇形趣味と博物学 堤中納言物語」(『国文学』第38巻第11号) 竹村信治「『虫めづる姫君』考」(『国文学攷』第153号、平成9年3月)など。
- (42) 原田隆吉「今鏡の思想(一)」(『文芸研究』第20集、昭和30年6月)・同「今鏡と末法思想」(『文芸研究』第50集、昭和40年6月)参照。なお、『今鏡』と「虫めづる姫君」の異能性の詳細については、別稿を予定している。